

日本語を母語とする英語学習者による英語結果構文の 容認性判断に影響を及ぼす言語的要因

平野 洋平

(2016年10月6日受理)

Linguistic Factors Influencing Acceptability Judgements of
English Resultative Construction for Japanese Learners of English

Yohei Hirano

Abstract: The present study investigated linguistic factors which influence acceptability judgements of English resultative construction for Japanese learners of English (henceforth, JLE). Resultative construction (henceforth, resultatives) can be broadly classified into two types: weak resultatives and strong resultatives (Washio, 1997). In weak resultatives, the main verb is always transitive and entails the final state of an event, while in strong resultatives, the main verb may be transitive or intransitive and does not necessarily entail the final state of an event. It has been observed that English allows both weak and strong resultatives while Japanese allows weak resultatives only. However, it remains unclear whether and how the difference between the two languages in the use of resultatives influences the acquisition of this construction. Here, we used an acceptability judgement task with pairs of pictures, and analyzed the data using one-way ANOVA followed by a multiple comparison test. Participants were composed of 28 JLE (university students all of whom majored in English) and 10 native English speakers. They were shown a pair of pictures with multiple test sentences in English. Using a 7-point scale they responded how natural they felt each sentence was. The task included 136 test sentences of which 24 were resultatives and 112 were distractors. We found the following three factors influenced acceptability judgement of resultatives for the JLE: (i) whether the main verb entails a change of state or not; (ii) whether the main verb is transitive or intransitive; and (iii) whether the resultative predicate is a prepositional phrase or an adjectival phrase. In conclusion, the results of this research suggest that it may be pedagogically necessary to pay attention to comparative characteristics of both English and Japanese, some of which can be attributed to Talmy's typological differences between a Satellite-framed language and a Verb-framed language (Talmy, 2000).

Key words: Resultative construction, Satellite-framed language, Verb-framed language, Second language acquisition, English education

キーワード：結果構文，サテライトフレーム言語，動詞フレーム言語，第二言語習得，英語教育

1. はじめに

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：柳瀬陽介（主任指導教員）、深澤清治、
松見法男

日本の英語教育において、動詞の項構造に重点を置く「文型」の指導・学習が果たしてきた役割は大きい。ただし、ある1つの文型に分類されるものの中に様々な表現が混在していることは言うまでもなく、また、

英語の中には動詞の性質だけでは説明がつかない文法現象も多く存在する。そうした多様な表現や現象を理解する上で「構文」という概念を取り入れることの有用性を指摘する研究者も少なくない(岩田, 2012; 大庭, 2011)。しかし同時に、ある特定の構文としてまとめられるものの中にも、学習者にとって理解しやすい表現と理解しにくい表現が混在している可能性は十分に考えられる。そうした理解の差を分ける言語的な要因を明らかにしていくことは学習英文法の見直しを図る上でも有意義なことと言えよう。また、第二言語習得研究(以下、SLA)の分野では、母語の転移が研究対象の1つとして大きな地位を占めてきたが、日本における英語教育の在り方一特に、母語(日本語)の果たす役割一を再検討する上でも、その知見を日本の英語教育が抱えている現実的な問題と照らし合わせて吟味することが重要であろう。

日本語を母語とする英語学習者(以下、JLE)の大半はEFL(English as a Foreign Language)環境に置かれており、また、日本語と英語(以下、日英語)の間の言語的な距離も大きい。そうした点を考慮すると、JLEは母語である日本語を拠り所としながら英語学習を進める場合がその大半であると言って差し支えないだろう。しかし、英語には日本語に直訳できない表現がいくつもあり、その中には、英語では成立する一方で日本語では成立しないような項構造の表れ方が反映された表現や構文も含まれる。項構造の表れ方の違いが第二言語の習得に影響を及ぼす可能性はSLAの分野で指摘されてきたとおりである(White, 2003)。そうした点を踏まえ、JLEにとって学習上の躓きに繋がりのある言語的な要因を詳らかにしていくことは、SLAの分野に貢献するだけでなく、教育学的にも有意義なことと言える。

2. 英語結果構文の特徴と本研究の目的

日本語に直訳できない英語表現を含み、かつ動詞の性質だけでは説明のつかない現象を示す構文の1つに結果構文がある。結果構文は、「単一の動詞が表す行為ないし活動が原因となり、その直接的な結果として生じる状態を《結果述語》として表現した単一のセンテンス」(影山, 2009, p.101 [下線部は筆者])と定義される。具体例として以下の(1)-(3)を参照されたい。なお、例文中の下線部分が上述の定義における「結果述語」に相当する表現である。

(1) 弱い結果構文

- a. Tom broke the glass into pieces.

b. トムは グラスを 粉々に 壊した。

c. Tom painted the wall black.

d. トムが 壁を 黒く 塗った。

(2) 強い結果構文 [他動詞型]

a. Tom kicked the door open.

b. *トムは ドアを オープンに 蹴った。

c. トムは ドアを 蹴って 開けた。(蹴り開けた)

d. Tom shook his father awake.

e. *トムは 父親を パツチリに 揺すった。

f. トムは 父親を 揺すって 起こした。

(揺すり起こした)

(3) 強い結果構文 [自動詞型]

a. Tom ran himself tired. (疑似=再帰形)

b. *トムは (自分を) クタクタに 走った。

c. トムは クタクタになるまで 走った。

d. Tom ran his shoes ragged. (疑似≠再帰形)

e. *トムは 靴を ボロボロに 走った。

f. トムは 靴が ボロボロになるまで 走った。

結果構文は主動詞が含意する結果状態の有無により、「弱い結果構文」と「強い結果構文」の2種類に大別される(影山, 1996; Washio, 1997)¹。弱い結果構文とは、何らかの結果状態を含意する動詞が主動詞として用いられているものであり、強い結果構文とは、そうした含意のない動詞が主動詞として用いられているものである。また、後者の強い結果構文は主動詞の他動性により、他動詞型結果構文と自動詞型結果構文に下位区分される。

弱い結果構文が日英語の双方で成立するのに対し、強い結果構文は、動詞の他動性にかかわらず、英語でのみ成立し、日本語では成立しない。なお、(3a, d)のように自動詞型の強い結果構文の場合、その特徴の1つとして、通常その動詞が取らないような目的語(以下、疑似目的語)が結果述語と共に項構造に含まれる点があげられる。つまり、(2a)や(2d)のような他動詞型結果構文の場合、結果述語を省略しても“Tom kicked the door.”や“Tom shook his father.”という文が文法的に成立するのに対し、(3a)や(3d)のような自動詞型結果構文の場合、結果述語を省略すると“*Tom ran himself.”や“*Tom ran his shoes.”のように非文となるのである。

さて、強い結果構文は日本語では成立しないことを述べたが、英語の強い結果構文が表す意味を自然な日本語表現に訳出しようとする、(2c)の「開ける」、(2f)の「起こす」、(3c, f)の「～になる」のように、状態変化を意味する動詞を含めた表現にする必要が出てくる。こうした日英語間の差異は、以下に示す移動構文

における日英語間の差異と併せて議論されてきた（小野, 2004, 2012; 米山, 2009）。

(4) 方向性移動動詞 + 着点句

- a. Tom came/went to the station.
- b. トムは 駅に 来た/行った。

(5) 移動様態動詞 + 着点句

- a. Tom ran to the park.
- b. *トムは 公園に 走った。
- c. トムは 公園に 走って 来た/行った。

これらの内, (4a) のように方向性移動動詞 (go, come など) が着点句と共に起している英文は, (4b) に示す通り日本語での直訳が可能であるのに対し, (5a) のように移動様態動詞 (run, swim など) が着点句と共に起している英文は (5b) に示す通り日本語での直訳が (少なくとも到着したことまでを含意する表現としては) 認められない。(5a) のような英語表現を自然な日本語表現として訳出するには, (5c) に示す通り, 「(走って) 来た」, 「(走って) 行った。」のように, 移動様態動詞だけでなく方向性移動動詞を併せて用いる必要がある。こうした日英語間の差異は, Talmy (2000) による類型論に基づき, サテライトフレーム言語・動詞フレーム言語の特徴として, 以下のようにまとめられる。

(6) a. サテライトフレーム言語 (≧英語)

移動構文・結果構文では, 手段・方法・原因・様態が動詞に表現され, 着点や結果は動詞以外の要素 (=サテライト) に表現される。

b. 動詞フレーム言語 (≧日本語)

移動構文・結果構文では, 手段・方法・原因・様態が動詞以外の要素に表現され, 着点や結果はそれらを含意する移動動詞や状態変化動詞によって表現される。

(小野, 2012, p.333 [一部変更])

こうした日英語間の差異に基づく SLA 研究として, JLE による英語移動構文の習得を取り扱ったものには Inagaki (2001, 2002) などがあるが, JLE による英語結果構文の習得を取り扱ったものは管見の限りでは Yotsuya et al. (2014) のみである。Yotsuya et al. (2014) は研究課題の1つとして, 「JLE が英語では弱い結果構文と強い結果構文の双方が成立することを知っているか」という課題を挙げ, 「JLE は英語の弱い結果構文を容認するが強い結果構文を容認しない」という仮説の検証を試みている²。本稿は, Yotsuya et al. (2014)

における検証方法上の限界点と Yotsuya et al. (2014) では扱われていないタイプの結果構文の存在を指摘し, それらの点に留意しつつ, 上記の日英語間の差異や英語結果構文の特性を踏まえた上で, JLE による英語結果構文の容認性判断に影響を及ぼす言語的要因を調査することを主な目的とするものである。

3. 先行研究の問題点

3.1. 検証方法上の限界点

3.1.1. 真偽値判断タスク

Yotsuya et al. (2014) は, まず JLE が結果構文を知っているかどうかを確認する実験としてイラストを用いた真偽値判断タスクを採用している。このタスクでは, 図1に示すようなイラストが以下に述べるような形で提示される。まず左側のイラストが2秒間提示され, さらに真ん中の矢印が2秒間提示される。加えて右側のイラストが提示される。その4秒後, 左側のイラストが消されるとともに, イラストの下にテスト文が音声とともに提示される。実験参加者はそのテスト文がイラストの示す状況に合うかどうかを T(True) か F(False) で答えるように求められる。テスト文は “John painted the wall black.” のようなものである。図1のイラストでは, 黒く塗られたのは目的語の壁であり, テスト文はこの状況を正しく表している。しかし, 壁を塗っている動作主の John が真っ黒になったイラストが提示された場合も, 同じテスト文がその状況を表す英文として適切なものかどうかを問うような実験となっている。もちろん, この文はそうした状況を表すものとしては適切ではない。

Yotsuya et al. (2014) は, このタスクは JLE が英語結果構文を知っているかどうかを確認するためのものであるとしているが, このタスクはその判断をするには不十分なタスクであると考えられる。この実験で確認できるのは, 結果構文において結果述語が叙述するものは直接目的語であるという直接目的語の制限 (Levin and Rappaport Hovav, 1995) の知識に過ぎない。さらに言えば, いわゆる SVOC の第5文型において, C が叙述するのが S ではなく O であるという

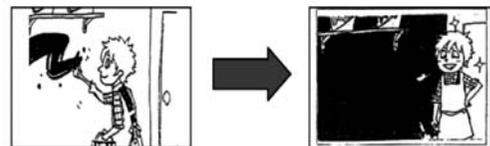


図1 真偽値判断タスクのイラスト例
(Yotsuya et al. (2014), p.95, (8a))

ことに対する知識を確認したに過ぎない。また、学習者がTかFで回答するタスクであるため、テスト文が完全に不適切なものであると感じない限り、つまり、ある程度適度な表現であると感じた場合にも、その表現をTと判断し、結果としてTの回答が過剰に多くなる可能性を多分に含むタスクであると考えられる。

3.1.2. 容認性判断タスク

Yotsuya et al. (2014) は、上述の真偽値判断タスクの結果からJLEが結果構文を知っていると判断した上で、「JLEは英語の弱い結果構文を容認するが強い結果構文を容認しない」という仮説を検証するために、以下に述べるような容認性判断タスクを採用している。

このタスクでは、表1に示すように、弱い結果構文と強い結果構文をそれぞれ自然な文脈と不自然な文脈に当てはめ、それぞれの文脈に当てはめられた弱い結果構文と強い結果構文がどの程度自然なものかを4件法で答えるように参加者に求めている。

表1 容認性判断テストの例文
(Yotsuya et al. (2014), p.96, Table 4を改変)

| 構文 | 文脈 | |
|----|--|--|
| | 自然/真 | 不自然/偽 |
| 弱い | The window was dirty, so ... | The window was broken, so ... |
| | <u>John wiped the window clean.</u> | |
| 強い | John decided to make a name plate. First ... | John decided to make a wooden shelf. First ... |
| | <u>he hammered the metal flat.</u> | |

Yotsuya et al. (2014) は、この実験の結果から、JLEが英語の弱い結果構文と強い結果構文の双方を同程度に容認するという結論を出している。しかしながら、このタスクは結果構文そのものの容認度を測る検証法として十分なものとは言えない。このタスクでは結果構文が文法的に正しい文として提示されている。それゆえ、学習者はあくまでも、結果構文が文脈に沿うものであるかの判断をしたに過ぎず、結果構文が文法的に容認できるか否かの判断をしたとは考えられない。また、文脈に沿うかどうかの判断も結果構文に対する判断というよりは文中の一部の語彙のみに基づく判断になってしまっている可能性が否めない。例えば、dirtyとcleanという語の関係がbrokenとcleanという語の関係よりも自然だと判断されたり、a name plateとthe metalという語の関係がa wooden shelfとthe metalという語の関係よりも自然だと判断されたりする可能性が考えられる。

3.2. 実験に含まれていない結果構文

本節の最後に、先行研究では自動詞型の強い結果構

文が取り上げられていないことについて触れたい。冒頭で英語の強い結果構文には主動詞が他動詞のものと自動詞のものがあることを述べたが、Yotsuya et al. (2014) では(3)に示したような自動詞型の強い結果構文は、真偽値判断タスクにも容認性判断タスクにも含まれていない。このタイプの結果構文を実験に含めることで、JLEによる結果構文の容認性判断が、主動詞が含意する結果状態の有無だけでなく、主動詞の他動性にも影響を受けるかを検証することが可能となる。JLEによる結果構文の習得にかかわるより詳細な要因を明らかにするためにも、このタイプの結果構文を実験に含めることは有意義なことと思われる。

4. 研究課題と仮説

本研究は、前節で述べた先行研究における検証方法上の限界点に留意し、先行研究では取り扱われていないタイプの結果構文も対象に含めた上で、JLEによる英語構文に対する容認性判断の検証を行う。具体的には下記の研究課題に取り組むために、その下に述べる仮説の検証を試みる。

【研究課題】JLEによる英語結果構文の容認性判断に影響を及ぼす言語的な要因は何か。

【仮説1】日本語では弱い結果構文が成立し、強い結果構文が成立しないため、JLEによる英語結果構文の容認性判断は、(1) 弱い結果構文を(2)・(3) 強い結果構文よりも容認しやすい。

【仮説2】他動詞型の英語結果構文における目的語は本来その主動詞が取りうる目的語であるのに対して、自動詞型の英語結果構文の目的語は本来その動詞が取るような目的語でないため、JLEによる英語結果構文の容認性判断は、(2) 他動詞型結果構文を(3) 自動詞型結果構文よりも容認しやすい。

この研究課題と仮説は、主動詞の特性を基に英語結果構文を(1)-(3)の3種類に分類した上で設定したものであるが、英語結果構文の研究には、主動詞の特性をベースとする語彙意味論的なアプローチに加えて、使役事象と結果事象の時間的なアプローチや、慣習化・イディオム化を重視するアプローチなども存在する(影山, 2007)。そうした各種アプローチを念頭に置き、以下の要因がJLEによる英語結果構文の容認性判断に影響を及ぼすかどうかを追加課題として分析する。

【追加課題1】JLEによる弱い結果構文の容認性判断は、結果述語の統語範疇に影響を受けるか。(1a) vs. (1c)

【追加課題2】JLEによる他動詞型の強い結果構文の容認性判断は、主動詞が「瞬間的な接触(衝撃)を

伴う動詞」であるか否かに影響を受けるか。(2a) vs. (2d))

【追加課題3】JLEによる自動詞型の強い結果構文の容認性判断は、疑似目的語が再帰代名詞であるか否かに影響を受けるか。(3a) vs. (3d))

5. 方法

5.1. 実験参加者

実験参加者として、JLE28名と英語母語話者（以下、NSE）10名に協力してもらった。JLEは某国立大学Xの英語専攻の1年生であり、NSEは、3名が某国立大学Xの教員、6名が某公立大学Yの教員（ただし、その内1名は教員の配偶者）、残り1名が某私立大学Zの教員であった。以下、JLE28名を実験群A、NSE10名を実験群Bとする。実験群Aの英語のレベルはTOEICで475-860点（平均641.8点）であった。

5.2. 検証実験

検証方法としてイラスト付き容認性判断テストを採用した。実験参加者には図2に示すような2枚1組のイラストを提示し、それと併せて結果構文、ならびに使役動詞のmakeなどを用いて同構文を書き換えた迂言的な表現などの複数のテスト文をランダムな順に並べて提示した。2枚1組のイラストの内、左側の1枚は結果構文の主動詞が表す行為・活動を（疑似）目的語と共に描写するものであり、右側の1枚は結果述語が表す結果状態を描写するものである。各イラストの下にその状況を表す1文を添えた。図2の場合、左側のイラストの下には“Ken crushed the can.”という1文を、右側のイラストには“As a result, the can became flat.”という1文を添えた。また、イラスト内に点線の丸印や矢印を加えることで、状態の変化した人・物（Figure）ならびに結果状態（Ground）に至るまでの推移を表した（Talmy, 2000）。

実験参加者には、2枚1組のイラストが表す一連の状況を描写する英文として、併せて提示されたテスト文がどの程度自然な表現であると感じるかを7段階で回

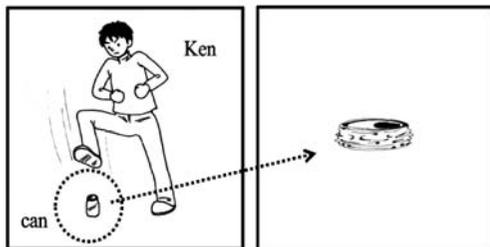


図2 実験に使用したイラストの例

答してもらった。7段階の回答項目は、移動構文の容認性判断を取り扱った先行研究 Inagaki (2001) を踏まえ、-3「完全に不自然」、-2「かなり不自然」、-1「やや不自然」、0「判断できない」、+1「やや自然」、+2「かなり自然」、+3「完全に自然」とした。

5.3. 材料と手続き

1組のイラストに対してテスト文の判断をしてもらう作業をタスクと呼ぶことにする。今回の実験に含めたタスクの種類と数は以下の通りである。(1) 弱い結果構文用のタスク、(2) 他動詞型の強い結果構文用のタスク、(3) 自動詞型の強い結果構文用のタスク、それぞれ8つずつ、計24のタスクを用意した。参加者には、ランダムな順序で回答してもらった。

なお、(1)のタスクには、(1a) 結果述語が前置詞句のもの、(1c) 結果述語が形容詞句のものを4つずつ含めた。また、(2)のタスクには、(2a) 主動詞が「瞬間的な接触（衝撃）を伴う動詞」のもの、(2d) 主動詞が衝撃を伴わない動詞のものを4つずつ含めた。最後に、(3)のタスクには、(3a) 疑似目的語が再帰代名詞のもの、(3d) 疑似目的語が再帰代名詞でないものを4つずつ含めた。

仮説1・2の検証としては、(1)-(3)の3分類による容認性判断のデータを基にし、追加課題1-3については、(1a), (1c), (2a), (2d), (3a), (3d)の6分類による容認性判断のデータを基にして、いずれも一元配置分散分析を用いて分析をした。

6. 結果

6.1. 仮説1・2の検証

仮説1の検証としては、(1) 弱い結果構文と (2)・(3) 強い結果構文に対するJLEの判断結果をそれぞれ比較した。仮説2の検証としては、強い結果構文のみに焦点を当て、(2) 他動詞型結果構文と (3) 自動詞型結果構文に対するJLEの判断結果を比較した。各実験群の各英文タイプに対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）は以下の表2と図3の通りであった。なお、標準偏差の値を丸括弧内に示している。また、実験群ごとの一元配置分散分析の結果は、JLEについては、 $F(2, 54) = 166.68, p < .001, \eta^2 = .619$ で有意であり、効果量も大きかった。NSEについては、 $F(2, 18) = 6.64, p = .007, \eta^2 = .281$ で有意であり、効果量も大きかった。以下の表3に、多重比較検定の結果を示す。

6.2. 追加課題の検証

追加課題1-3の検証としては、それぞれ、(1a) と (1c), (2a) と (2d), (3a) と (3d) に対するJLEの判断結果を比較した。これら計6種類の結果構文に対す

表2 各種結果構文に対する容認性判断の結果 (3分類)

| 実験群 | テスト文の種類 | | |
|------------------|----------------|-----------------|-----------------|
| | (1) | (2) | (3) |
| A: JLE n = 28 | 0.54 (0.89) | -1.45 (0.94) | -2.18 (0.92) |
| B: NSE n = 10 | 2.25 (0.65) | 1.84 (0.77) | 1.04 (1.07) |

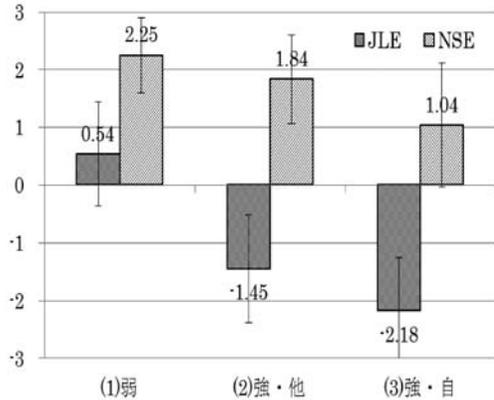


図3 各種結果構文に対する容認性判断の結果 (3分類)

表3 仮説に関連する多重比較検定の結果

| 実験群 | 比較する結果構文の種類 | | |
|------------------|------------------|------------------|------------------|
| | (1) vs. (2) | (1) vs. (3) | (2) vs. (3) |
| A: JLE n = 28 | sig. p < .001 | sig. p < .001 | sig. p < .001 |
| B: NSE n = 10 | n.s. p = .237 | sig. p = .002 | sig. p = .030 |

有意水準 p < .05

る。各実験群の容認性判断の結果(平均値と標準偏差)は表4と図4の通りであった。なお、標準偏差の値を丸括弧内に示している。また、実験群ごとの1元配置分散分析の結果は、JLEについては、 $F(5, 135) = 51.67, p < .001, \eta^2 = .587$ で有意であり、効果量も大きかった。NSEについては、 $F(5, 45) = 10.654, p < .001, \eta^2 = .448$ で有意であり、効果量も大きかった。表5に、多重比較検定結果の内、追加課題1-3に関連するものを示す。

7. 考察

7.1. 仮説1・2の検証結果について

実験群 A において、(1) タイプの英文に対する容認性判断が(2)と(3)の双方のタイプの英文に対する容認性判断を統計的に有意に上回ったことから、仮説1が支持される結果となった。また同様に、実験群 A

表4 各種結果構文に対する容認性判断の結果 (6分類)

| 群 | テスト文の種類 | | | | | |
|-----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| | (1a) | (1c) | (2a) | (2d) | (3a) | (3d) |
| A:JLE n = 28 | 1.25 (1.12) | -0.17 (1.17) | -1.28 (1.12) | -1.62 (0.89) | -2.38 (0.99) | -1.97 (0.96) |
| B:NSE n = 10 | 2.06 (0.62) | 2.45 (0.80) | 2.83 (0.47) | 0.90 (1.44) | 1.79 (0.83) | 0.29 (1.50) |

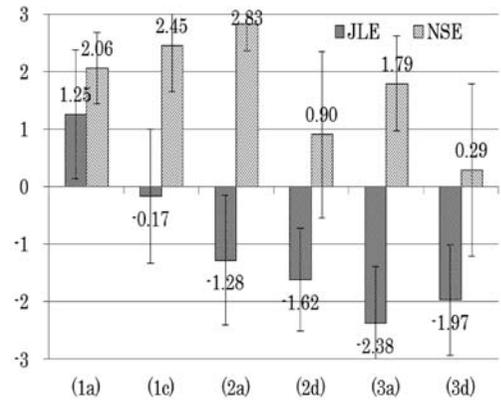


図4 各種結果構文に対する容認性判断の結果 (6分類)

表5 追加課題に関連する多重比較検定の結果

| 実験群 | 比較する結果構文の種類 | | |
|------------------|------------------|------------------|------------------|
| | (1a) vs. (1c) | (2a) vs. (2d) | (3a) vs. (3d) |
| A: JLE n = 28 | sig. p < .001 | n.s. p = .198 | n.s. p = .131 |
| B: NSE n = 10 | n.s. p = .350 | sig. p < .001 | sig. p < .001 |

有意水準 p < .05

において、(2) タイプの英文に対する容認性判断が(3)タイプの英文に対する容認性判断を統計的に有意に上回ったことから、仮説2も支持される結果となった。以下、それぞれの検証結果に考察を加える。

まず、仮説1の検証結果について考察する。第1節で述べた通り、弱い結果構文は日英語の双方で成立する一方、強い結果構文は英語でのみ成立し、日本語では成立しない。JLEが英語の弱い結果構文を強い結果構文よりも容認しやすいという結果に至った理由として、母語においてその項構造の表れ方が成立するか否か一つたり、直訳可能か否か—が、JLEによる容認性判断に影響を及ぼしていた可能性が考えられよう。英語結果構文が日本語に直訳できるか否かは主動詞が結果状態を含意するものであるか否かによって決まる。このことから、主動詞による結果状態の含意の有無がJLEによる容認性判断に影響を与えているものと結論付ける。これは動詞が取る項構造や文型という統語的

な要素だけでなく、動詞が持つ含意という意味的な要素までもが影響を及ぼしたと見ることができよう。

なお、この結果は Yotsuya et al. (2014) の検証結果とは一致しない。実験手法の違いから、JLE は結果構文を文法的な文として提示された場合は、それが弱い結果構文であれ強い結果構文であれ、その解釈に困難を来すことはないが、単文としてその容認性を問われた場合は、総じて自然な表現としては受け入れにくく、中でも日本語に直訳できない表現はより一層不自然な表現であると感じる傾向があることが示唆された。

次に、仮説2の検証結果について考察する。第1節で述べた通り、他動詞型結果構文の目的語はその主動詞が本来項構造として取りうるものである一方、自動詞型結果構文の(疑似)目的語はその主動詞が本来目的語として取りうるものではない。主動詞が他動詞であれ自動詞であれ、強い結果構文は日本語には直訳することができない。このことから、JLE による強い結果構文に対する容認性判断において、他動詞型よりも自動詞型の方が、非容認性(容認されない程度)が高いという結果に至った理由としては、母語による影響というよりは、そうした動詞の他動性に関する知識による影響を受けた可能性が高いと言えよう。

英語結果構文、特に、強い結果構文は JLE にとって input の中にそれほど多く含まれているとは考えにくい。その点が、JLE が総じて英語結果構文を不自然な表現として感じやすいという結果につながった部分もあるだろう。しかし今回の検証結果から、JLE が、さほど触れたことがない表現に対しても、それまでに学習した文法的な知識(動詞の文型や動詞と目的語の関係など)に基づきながら(非)容認性の判断をすることが示唆されたと言えよう。その意味でも明示的な指導・学習が果たしている役割は少なくないものと考えられる。

7.2. 追加課題の検証結果について

表5の各組合せの比較検定の結果に考察を加える。まず、(1a)-(1c) についてであるが、実験群 B では有意差が確認されなかった。このことから NSE は結果述語の統語範疇にかかわらず、弱い結果構文を自然な表現として受け入れていることがうかがえる。一方、実験群 A では (1a) のように結果述語が前置詞句であるものを、(1c) のように結果述語が形容詞句であるものよりも容認しやすいということが分かった。その原因として、JLE は、(1a) の “into pieces” のような前置詞句型の結果述語を、(1b) の「粉々に」に相当するものと捉え、さらに “into” のような前置詞句の主要部を日本語の「～に」という表現に相当するものとみな

しやすいことが挙げられる。一方、(1c) の “black” のような形容詞句型の結果述語に対しては、(1d) の「黒く」という訳語が相当することにはなるが、英語の形容詞には日本語の形容詞のような活用変化がない。さらには、Washio (1997) も指摘するように、日本語には英語の形容詞に対応する単一の範疇がないことも影響を及ぼしていることが考えられるだろう。

次に、(2a)-(2d) についてであるが、実験群 B は主動詞が「瞬間的な接触(衝撃)を伴う動詞」である場合に結果構文をより自然な表現であると感じることが分かった。これは、形容詞の結果述語が表す状態が主動詞の表す行為・活動によって「瞬間的に」達成される場合に制限されることがあることに起因しているものと考えられる。以下に示す通り、“dead” という結果述語は “shoot” とは共起できる一方で “knife” とは共起できない。それに対し、“to death” という結果述語は “shoot” と “knife” と共起可能である。

(7) a. Jesse [*knifed/shot] him dead.

b. Jesse [knifed/shot] him to death.

(影山, 2001, p.176)

NSE の実験群 B が (2a) よりも (2d) を自然であると感じた原因の1つには、衝撃を伴う動詞の表す行為・活動の方がその他の動詞が表す行為・活動よりも、結果状態を「瞬間的に」引き起こすことがイメージしやすいことが考えられる。

一方 JLE である実験群 A では、(2a) と (2d) の間に統計的な有意差は確認されなかった。このことから、JLE の容認性判断は行為・活動とそれによって引き起こされる結果との因果関係が「瞬間的に」成立するかどうかという要因の影響を受けにくいと推測される。また、同じ形容詞型の結果述語が用いられている結果構文であっても主動詞が結果状態を含意する場合の (1c) と比べると、容認度が下がる。このことから JLE は主動詞の含意する結果状態の有無に敏感であることが改めて確認できたと考えよう。

最後に (3a)-(3d) についてであるが、実験群 A ではこれら2つのタイプの間には有意差は確認されず、その双方が不自然な表現として判断される一方、実験群 B では、有意差が確認され、(3a) タイプが (3d) タイプよりも自然な表現として判断される結果となった。NSE である実験群 B による判断においてこうした差異が確認されたことは、自動詞型結果構文の内、(3a) のように疑似目的語が再帰代名詞のものがその典型的なタイプであり、(3d) のように疑似目的語が再帰代名詞でないものに対しては英語母語話者の中でも文法

的な表現として認めない人もいるという、Goldberg (1995) の指摘に合致する結果と言えよう。一方、JLE である実験群 A による判断結果からは、JLE による英語結果構文の容認性判断は、主動詞の他動性に影響されるということが改めて示唆されたと言えよう。JLE は、再帰代名詞が他動詞と共に起る表現(例, “Tom enjoyed himself at the party.”)にはある程度慣れているものと思われる。また、まず自動詞として学習する動詞の中には他動詞としての用法を持つものがあり(例, “Tom runs a coffee shop.”), 他動詞としての用法では、動詞の表す意味が自動詞として用いられた場合と異なることがあるということも経験的に知っているものと考えられる。JLE が動詞の他動性とそれに伴う動詞の意味の差異に関する知識を持ち合わせており、そうした知識が自動詞型の英語結果構文の容認性判断に影響を及ぼしていた可能性が示唆されたものと考えられる。

8. まとめと英語教育への示唆

これまでの議論から、JLE による英語結果構文の容認性判断には、(i) 主動詞の含意する結果状態の有無、(ii) 主動詞の他動性、(iii) 結果述語の統語範疇が影響を及ぼすものと結論付ける。また、JLE が容認性判断をする際に既習の文法的知識(の一部)に依存している面や、日英語間の特性の違いが容認性を下げた面があることが確認できたと言えよう。日本の中学校や高等学校の英語教育において、結果構文が独立した構文として明示的に指導されることはほとんどないものと思われる。実際、筆者の確認する限り、英文法の参考書の中で取り上げられることがあるとしても、いわゆる5文型の指導の際に、(1a) や (1c) のような弱い結果構文が例文として含まれている程度である。しかし、結果構文は、これまでの議論からもわかる通り、日英語の表現方法の差異を理解する上で有益な働きを担いうる構文の1つになると考えられる。以下、動詞と結果述語(形容詞句のもの)に焦点を当て、英語と日本語双方の特性を意識的に対照させるような指導・学習法を提案して本稿を締め括ることとする。

まず、動詞については、手段・原因・様態などが動詞に表現されるというサテライトフレーム言語としての英語の特性を意識的に学習することが、学習者がより自然な英語表現に習熟して行く上で効果的であると考えられる。1つの試みとして、英語には見られない日本語の現象である「複合動詞」を活用した指導・学習を提案したい。日本語には動詞と動詞の複合した複合動詞が存在するが、この中には手段・原因・様態

などを表すものもある。こうした日本語の表現をそれに対応する英語表現と照らし合わせた指導を施すことで、学習者が結果構文のみならず、英語の様々な表現に習熟していくことは十分に期待できよう。

- (8) a. 手段 She pushed the window open. (押し開ける)
 b. 原因 He burned to death. (焼け死ぬ)
 c. 様態 He stormed into the house. (怒鳴り込む)
 d. 補文関係 He used up his energy. (使い果たす)
 (影山, 1999, p.197より抜粋)

また、同様の指導で、以下のような「動詞の反他動性」に対する気付きを促せる可能性もあろう。反他動性とは、ある他動詞が、on/off/along/through などの小辞と共に起した場合に、その動詞が単独で用いられた場合には問題なく目的語として選択できる名詞句を、目的語として選択できなくなる現象を指す(小川, 2012)。

- (9) a. John washed the dirt/*the shirt off.
 (cf. John washed the shirt/*the dirt.)
 b. 太郎は汚れを洗い落としした／
 *服を洗い落としした／*汚れを洗った。
 (小川, 2012, p.317 [下線部は筆者])

さらには、手段・原因・様態などを動詞で表現する英語の特性に習熟していけば、その後の発展的な学習として、以下に示す way 構文や time away 構文などに習熟することも容易になると考えられる。

- (10) way 構文
 a. Dora drank her way down the street.
 b. *Dora drank scotch her way down the street.
 (Jackendoff, 1997, p.545)
- (11) time away 構文
 a. Fred drank the night away.
 b. *Fred drank scotch the night away.
 (Jackendoff, 1997, p.535)

次に、結果述語についてだが、(1b, d) に示した通り、英語結果構文の結果述語の直訳表現には二形のものどク形のものがあるが、日本語の場合、形態的には形容詞と副詞の活用が同形になる点や、二形については助詞のニと同形になるという点が、学習者が英語の形容詞の用法を正確に身に付けて行く上で妨げとなる可能性が考えられる。また、上でも述べた通り、日本語には英語の形容詞に相当する単一の統語範疇が存在しないという問題もある。それらの点を踏まえ、英語の形

容詞で表されるものが、日本語ではどのような要素で表現されるのか、また、日本語のどの要素が英語の形容詞で表現されるのかを対照的に指導・学習することもまた有意義であると言える。例えば、英語の形容詞が日本語では以下に示すように様々な統語範疇に相当することを意識させながら、英文和訳や英作文をさせてみるのも良いであろう。

(12) (i) 形容詞

- a. Mary is pretty.
- b. メアリーは かわいい。

(ii) 動詞

- a. He is alive.
- b. 彼は 生きている。

(iii) 形容動詞

- a. The room is clean.
- b. その部屋は きれいだ。

(iv) 名詞

- a. This fish is raw.
- b. この魚は 生だ。

(Washio, 1997, p.2 [下線は筆者])

いずれの場合も、学習言語である英語と母語である日本語とのそれぞれが持つ特性を念頭に置いた上での指導・活動となる。このように、母語と対照的に英語を指導・学習することが実際に効果的だということが明らかになれば、「メタ言語意識 metalinguistic awareness」(大津, 2012)を養うという意味でも、日本の英語教育において母語の果たす役割は大きいということが再確認できると言えよう。今後はそのような実証的な成果を追及することも課題の1つとなるであろう。

【注釈】

- 1 「弱い結果構文」・「強い結果構文」は Washio (1997) による用語である。影山 (1996) は、それらをそれぞれ「本来的結果構文」・「派生的結果構文」と呼んでいる。第2節で取り上げる先行研究でも Washio の用語が採用されていることもあり、本稿では Washio の用語を採用する。
- 2 Yotsuya et al. (2014) は、JLE が2種類の結果構文(弱い・強い)を容認するかという課題と併せて、以下の (i) のような移動構文が2種類の解釈 (Directional・Locational) を持つことを容認するかという課題、さらには、Suzuki (2012) の分析に基づき、それらを1つのパラメータ値の設定で説明できるかという

課題に取り組んでいる。

- (i) The bird flew above the tree.

【参考文献】

Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago, University of Chicago Press.

Inagaki, S. (2001). Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese. *Studies in Second Language Acquisition*, 23, 153-170.

Inagaki, S. (2002). Japanese learners' acquisition of English manner-of-motion verbs with locational/directional PPs. *Second Language Research*, 18, 3-27.

岩田 彩志 (2012). 英語のしくみと文法のからくり—語彙・構文アプローチ, 開拓社.

Jackendoff, R (1997) Twistin' the night away. *Language*, 73, 534-559.

影山 太郎 (1996). 動詞意味論—言語と認知の接点, くろしお出版.

影山 太郎 (1999). 形態論と意味, くろしお出版.

影山 太郎 (編) (2001). 日英対照 動詞の意味と構文, 大修館書店.

影山 太郎 (2007). 英語結果述語の意味分類と統語構造, 小野 尚之 (編), 結果構文研究の新視点, pp.33-65, ひつじ書房.

影山 太郎 (2009). 語彙情報と結果述語のタイポロジー, 小野 尚之 (編), 結果構文のタイポロジー, pp.101-139, ひつじ書房.

Levin, B., & Rappaport H. M. (1995). *Unaccusativity: At the syntax—lexical semantics interface*, Cambridge, MIT Press.

大庭 幸男 (2011). 英語構文を探求する, 開拓社.

小川 芳樹 (2012). 結果構文と動詞小辞構文の統語的分析と英語教育への応用, 藤田 耕司・松本 マスミ・児玉 一宏・谷口 一美 (編), 最新言語理論を英語教育に活用する, pp.311-322, 開拓社.

小野 尚之 (2004). 移動と変化の言語表現: 認知類型論の視点から, 佐藤 滋・堀江 薫・中村 渉 (編), 対照言語学の新展開, pp.3-26, ひつじ書房.

小野 尚之 (2012). サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語, 藤田 耕司・松本 マスミ・児玉 一宏・谷口 一美 (編), 最新言語理論を英語教育に活用する, pp.323-335, 開拓社.

大津 由紀雄 (編) (2012). 学習英文法を見直したい, 研究社.

- Suzuki, T. (2012). Strong resultatives as a bounded pathPP construction: PathPP structure and parametrized path head movement, *Coyote Working Papers* 20, 109-117.
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics*, Cambridge, MIT Press.
- Washio, R. (1997). Resultatives, compositionality and language variation, *Journal of East Asian Linguistics*, 6, 1-49.
- White, L. (2003). *Second language acquisition and Universal Grammar*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 米山 三明 (2009). 意味論から見る英語の構造—移動と状態変化の表現を巡って—, 開拓社.
- Yotsuya, A., Asano, M., Koyama, S., Suzuki, K., Shibuya, M., Iwagami, E., ... Hirakawa, M. (2014). Crosslinguistic effects in L2 acquisition: Strong/weak resultatives and the directional/locational interpretation of PPs in L2 English by Japanese speakers. In R.T. Miller, K. I. Martin, C. M. Eddington, A. Henery, N. M. Miguel, A. M. Tseng, A. Tuninetti, & D. Walter (Eds.), *Selected Proceedings of the 2012 Second Language Research Forum* (pp. 89-100). Somerville, MA: Cascadilla Press.